



新潟県・福島潟の水系基盤と

古太田川のこれから

を考える旅

2023年10月14日～10月16日

参加者（敬称略）：

熊本大学：星野 裕司

国土舘大学：二井 昭佳

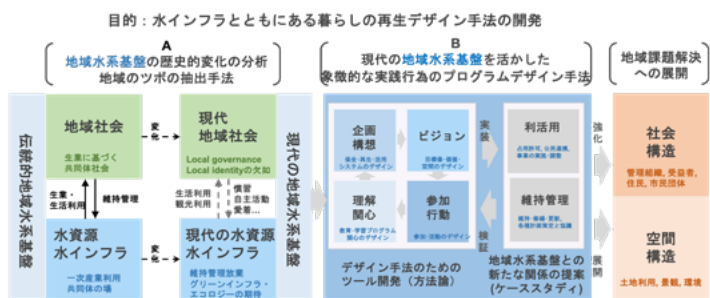
京都大学：谷川 陸

早稲田大学：佐々木 葉、小澤 広直、M2 長澤 歩、麥 廣之、結城 拓海、M1 緒方 陸人、B4 塩山 祈

2023年10月 早稲田大学 景観・デザイン研究室

# 概要・目的

「地域水系基盤研究会」の動的デザインのケーススタディ地として、2月の新潟でのスタディツアーに続き、新潟県新発田市・古太田川周辺集落にて、参加・活動のデザインと教育プログラムの実践を行った。古太田川周辺の集落は、福島潟水路の歴史的变化の分析により抽出した、福島潟周辺の地域のツボとなり得る地域である。今回のツアーでは、住民や近隣の小学校とともに、伝統的な水利用の履歴が残る古太田川において、古太田川のデザインについて考えた。



「地域水系基盤」のデザイン手法

# スケジュール

- 10/14  
終日：「古太田川のかわばた滞在」
- 10/15  
午前：  
・「かたごほんの会」の活動へ参加  
・戻されつつある潟・国営干拓地  
・棕堰、川の十字路  
・ビュー福島潟  
午後：  
・「古太田川のお話会」
- 10/16  
午前：新発田市立佐々木小学校 4年生の総合の学習に参加  
午後：ラップアップ



3日間で訪れた場所

# 1 福島潟で行われる市民活動の体験

## 「かたごはんの会」の活動

日時：10月15日 7:00～9:00

散歩コース：潟来亭→雁晴舎→自然学習園の池→潟来亭

朝ごはん：主催者の皆さんが準備された、炊き込みご飯・ハスの茎の味噌汁・漬物

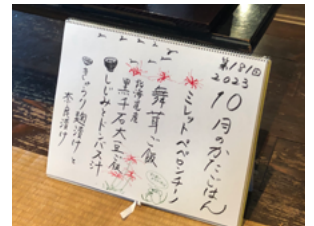
「かたごはんの会」は、毎月第3日曜日に福島潟で活動を行っている市民団体である。活動内容は毎月ほぼ変わらず、福島潟の朝散歩後に、潟来亭で地元の食材を使用した朝食を食べている。「かたごはんの会」の運営メンバーは11名で、毎月1名が「散歩リーダー」として散歩コースを決め、福島潟の公園内の散策をしている。会の活動は20年以上続いており、今回参加した10月15日は第180回目の開催となった。

「かたごはんの会」の特徴は活動の「ゆるさ」であると会のメンバーは述べており、散歩中の会話は福島潟や生き物の話題だけでなく、雑談が主であった。学生から高齢者まで、初参加から常連まで、20名ほどが参加し、小雨が降る中、終始和気藹々とした雰囲気での終始活動が行われた。

食事後、参加者全員が自己紹介と一言の感想を発表したのち、「かたご飯の会」のメンバーの1名による『とくさんのよし笛』の読み聞かせが行われた。心のこもった朗読から、かつて福島潟が子供の遊びの場として使われていた様子が伺えた。また、潟来亭の囲炉裏にコロナ明け初めて火が焚かれ、食後のひとときが過ごされた。



朝散歩の様子



朝食の献立



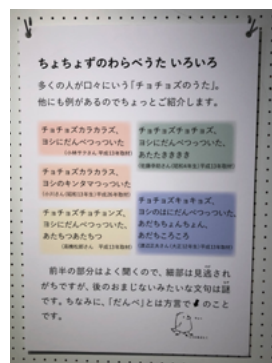
『とくさんのよし笛』の読み聞かせ



囲炉裏を囲む



上：佐藤さんによる案内の様子 下：「ちょちよず展」の展示物



## 水の駅「ビュー福島潟」

2月の視察と同様、「NPO 法人ねっとわーく福島潟」の佐藤安男さんのご案内のもと、ビュー福島潟の屋上から福島潟を眺めた。2月の視察の際の雪景色とは代わり、稲刈り後の2番穂や来春に向けた菜の花の緑に覆われる福島潟とその周辺の様子を俯瞰した。鳥たちの数は多くはなかったものの、福島潟ではオオヒシクイが10/3に初認されるなど、ハクチョウを含め冬鳥の様子も確認することが出来た。佐藤さんからは、水面を覆う菱の様子や、今年は気温が高く、1度刈った稲の2期目が多く生えてきていることなどについて説明いただいた。

ビュー福島潟5階の企画展示室では、『地元学シリーズ23弾「ちょちよず展」が開催されていた。「ちょちよず」とは、福島潟でよく見られる、オオヨシキリというスズメより少し大きい鳥である。オオヨシキリは4月末に福島潟に飛来し、5月から7月まで、ヨシのてっぺんなど鳴いている姿が見られる。展示では、地域に伝わる「ちょちよずの歌」や「ちょちよず」の巢の模型などが展示されており、『とくさんのよし笛』にも登場する「ちょちよず」を通じ、福島潟の昔の風景を想像することが出来た。

## 2 福島潟周辺の水系基盤を巡る

### 「戻されつつある潟」

平成 15 年度から開始した「福島潟河川改修事業」により福島潟の東部に湖岸堤が築堤され、福島潟の面積は 193ha から 262ha にまで再生した。我々が「戻されつつある潟」と呼んでいるのは、約 78 万 m<sup>3</sup> の掘削工事により水田を潟に戻す、大規模な自然再生を行った福島潟東部のエリアである。現在掘削工事は終わりに近づき、大部分に水が戻り、一面がハスに覆われている箇所も確認することができた。このエリアには、かつて使用されていた農業用のポンプやそれに繋がる電線が未だに残り、かつての人の生業の痕跡が見受けられる。



「戻されつつある潟」内に残された電線と電柱

### 椋堰

放水路の水が福島潟へ逆流することを防止しているゴム引布製起伏堰。福島潟と福島潟放水路の間に 1.5m の水位差を生み出し、放水路の水位を +0.6m ~ +0.8m に維持することにより、周辺の地下水位の低下を防止している。ゴム引布製起伏堰とは、袋状のゴムの内部に膨張媒体(水)を入れ、扉体を起立、倒伏させる可動堰である。ゴム引布製起伏堰の特徴として、膨張媒体の操作により、上流水位に合わせ堰高の多段階調整が可能である。椋堰の場合、通常時は起立している堰を、洪水時に倒伏させ、放水路への放流を増やすことが可能になる。



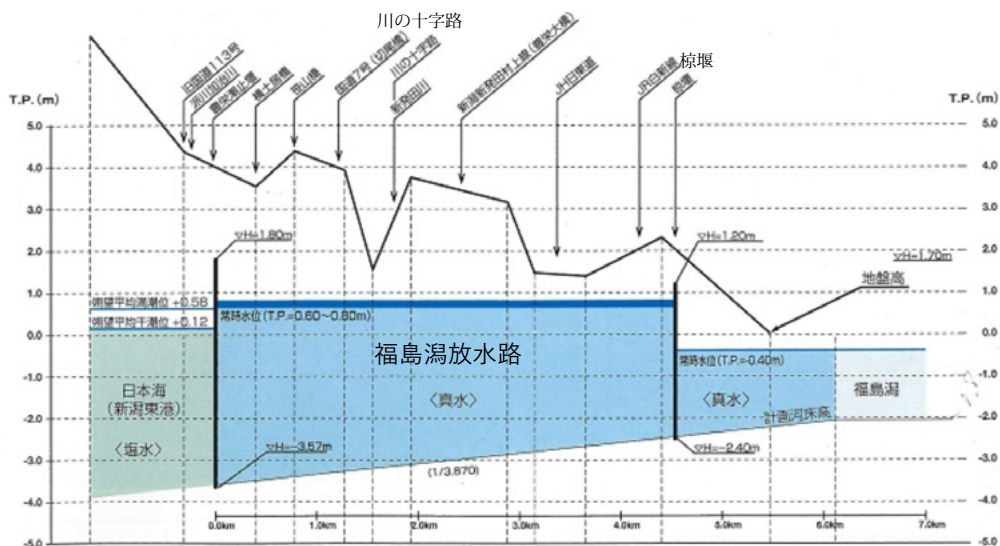
椋堰のゴム引布製起伏堰

### 川の十字路・浦ノ入水門

平成 15 年に通水した南北に流れる福島潟放水路と、東西に流れる新発田川が交わる地点。2 本の川が平面交差する珍しい構造が見られる。十字路に近接する新発田川の下流川に位置する浦ノ入水門は、通常時は福島潟放水路の水位を維持し、洪水時は水門を全閉し、福島潟放水路から新発田川への流入を防ぐ役割を持つ。



川が平面交差する「川の十字路」



福島潟放水路 縦断面図 (出典：新潟県 HP「福島潟放水路の概要」)

# 3 古太田川の「かわばた滞在」

## かわばた滞在

古太田川の特徴として、自宅の前に「川端（かわばた）」と呼ばれる、住民により管理されている、川と道路の間の土地がある。川端は、各家の敷地の延長線を境界とし、家庭ごとに、独自の使い方をされている点が特徴的である（右図参照）。しかし、住民へのヒアリングとアンケートから、近年では川と生活が遠のいていることが明らかになってきている。そのため、川端に住民が集まる風景を体験してもらうことが「かわばた滞在」の目的である。

「かわばた滞在」では、川端にテント、テーブル、ござを置き、住民の方々へ食事・休憩・談笑など自由に使用して頂いた。また、「風景採集」と題して、参加者に古太田川で好きな場所・気になった場所の撮影をして頂き、水面・草木・橋からの眺めなどの写真が計 128 枚集まった。

日時：

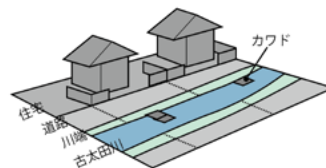
10月14日（土） 9:30～20:00（15日は雨天のため中止）

場所：

渡辺六栄区長のご厚意で使わせて頂いた、渡辺家の川端。

来場者：

9:30 から入れ替わり立ち代わり、近隣に住まう小学生から高齢者まで、多様な参加者が 20 名以上来場した。



古太田川が流れる下興野集落の基本的な構造

### 会場の設営

長テーブル・椅子・木製のパレット・ござ・夜間に照明として使用した投光機など、佐々木小学校より拝借したテント以外は渡辺区長の倉庫にあった備品を拝借した。



### カワドの新設

10/12 に制作したカワド。渡辺区長の家の前に位置した、以前木製のカワドがあった場所に再生したカワドである。重機を用い、コンクリート板、U字溝を用いて設置された。



## 「かわばた滞在」で行われた行為



新しく作成されたカワドを、生き物を捕まえるために利用する小学生



ござに座りまったりしている様子



住民から、畑の食材の煮物、枝豆、モクズガニ、新米で作られたおにぎりの差し入れを頂いた



住民の集う、会話が生まれる場となり、大いに盛り上がった



来場者に振る舞われたコーヒー



昭和 40 年台の古太田川の水彩画を描いていた住民の絵の展示

# 4 古太田川のお話会

6月に続き、古太田川周辺に住む住民との第2回のお話会を行った。お話会には20名の参加者が集まり、早稲田大学の研究成果の発表、星野先生・二井先生・谷川先生から「地域水系基盤」のケーススタディ地である、山形県長井市・旧小出村、滋賀県・伊庭、熊本県・白川夜市の事例紹介が行われた。

お話会後に参加者に記入して頂いた感想カードには、「集落が1つにまとまって何かをする力を得たような気がする」「古太田川の再発見が出来た」「普段の生活が支える意識が、人の集いを生む可能性を感じた」「この風景がずっと続けば良いと思った」など、古太田川での取り組みについて前向きな意見が多く得られた。

## お話会のプログラム

1. 佐々木先生による挨拶
2. 早稲田大学の学生(結城・塩山)による、これまでの経緯・調査結果の発表
3. 二井先生:「山形県長井市旧小出村の水路ネットワークとまちのかたち」
4. 谷川先生:「伊庭での取り組み～地域資源の管理・活用～」
5. 星野先生:「白川夜市」
6. 住民との質疑応答・意見交換



学生による発表の様子

## 「古太田川のお話会」での事例紹介の一部抜粋

### 山形県長井市・旧小出村

二井先生

- ・最上川の舟運で栄えた町。今は歯抜けになってきているが、昔の街並みが残る。国の重要文化的景観に指定されている。
- ・明治時代の地籍図をつなぎ合わせたり、人に話を聞いたり、水がどこからどこに流れているのかを一つ一つ調査したりしている。
- ・大きく6つの水路がある。

- ・花作川から取った水をそれぞれの家で使い、他の家を通らないようにしながら、平野川に捨捨てるというような仕組みがあり、それが長井の特徴だと思う。
- ・まちと水路の形は関係している。
- ・古太田川は古太田川での水の使い方が、この場所の個性。



二井先生による発表の様子

### 滋賀県・伊庭

谷川先生

- ・伊庭は石垣の景観が特徴的である。
- ・国の重要文化的景観に2018年に指定されている。
- ・古太田川の水路の使われ方と同じように、水路の水を飲んでいたり、生簀を冷蔵庫のように使ったり、洗濯・炊事に使ったりしていた。
- ・京都大学では水路の履歴の調査と使われ方の調査を実施してきた。
- ・昔好きだった風景・今残っていて好きな風景・これから残していきたい風景を地図にプロットして発表する、というワークショップを開催。

- ・復元してほしい場所、重点保存ゾーンを決めるなど、水路の価値づけも行ってきた地元の方の水路の見方が変わり、生簀の再現を料亭の方が自作でつくったこともあった。
- ・京都大学では、子供の頃の記憶を基に地域の地域資源を共有しながら、集落全体のビジョンをつくって、できることから実験してみよう、としている。
- ・新しいけど懐かしい風景をつくりながら、それを無理せず楽しく続けられる仕組みを試行錯誤しながら作る取り組みをしている。



谷川先生による発表の様子

### 熊本県・白川夜市

星野先生

- ・景観も安全性もどちらも大事、というところを両立するためにこのような公園を整備した。
- ・整備が終わった後に、地元の人たちが「良い場所できたから使おう」というチームを作った。
- ・リーダーは近くでバーをやっているアメリカ人、PTAの人や不動産の息子などがグループをつくり。現在は株式会社になっている。
- ・現在の夜市は人気イベントで、3000人くらいくるイベントになっている。
- ・整備と活動がバラバラでなく、活動が先にあったためにちょっとした工夫ができています。

- ・イベントをするときに不定期だと突発的すぎるため、定期開催になるということが大切だ。
- ・彼らの活動は補助を受けていないため、コロナ禍でもなんとかやっつけている。さらに大事なことは公園の維持管理で、毎月彼らがお客さんを迎えるために草刈をする。
- ・カワドも同じかもしれないが、大きな整備は思いやらないと思っていて、手摺に木の板をひっかけて簡易のカウンターにしたりしている。
- ・まず使ってみる、できたら定期化していく、後からハードの話が出てくると良い場所になる。



星野先生による発表の様子

# 「古太田川のお話会」の内容の一部抜粋

## 質疑応答・意見交換

(佐々木) 長井と伊庭は重要文化的景観に指定されてから使い方を考えていた？

(二井) まだ使い方ではいっていない。

(谷川) 2018年に指定される5年前から今日紹介する取り組みをしていた。調査と並行して活用をしていた。

(星野) 重要文化的景観に指定されるまで5年位は調査に入る。

(住民) 伊庭と長井は重要文化財になっているのか？現在江湊は重機を一部いれたりしている。文化財に指定されれば補助がでるのか。集落の金だけでは難しい。

(佐々木) 重要文化的「景観」。モノというよりは、それを成り立たせる暮らしや生業を残すためにモノや使い方を文化財にしようというもの。多少は補助が出るが、文化庁が持っているお金は国交省に比べると少ない。指定した直後数年は補助が出るが減っていくなどもある。文化財になれば万々歳というほど楽観できない。

(区長) 電線に引っかからないような木でなにか良いのがあれば教えてほしい。

(星野) 見た目が整うだけだとなかなか続かない。木が生えていて、水辺に木陰が落ちて、夕涼みができる、魚を捕るなど、「こんなことをやってみたい」を試しにやってみながら、だったらこんな木陰がいいかな、と考えていけるのが理想。毎週使っている場所だったら、木が大きくなる前に手入れをすることがあるかもしれない。過ごし方とセットでできることが理想かと思う。

(佐々木) 星野さんが言っていたような小さな工夫を一人で考え出すのが難しくなっているので、どういう風にしたらよいかを木を1本切るにしてもみんなで議論できると良い。

(星野) 文句から入るとカチンとくるが、「いいよね」と入れると良い。

(区長) 川端は個人の持ち物、みんなで共通して取り組めると良い。

(二井) カワドは個人の持ち物。水は用途が変化しているので新しい役割を探すときに、神社など個人の土地ではないところに少し大きめのカワドをつくってみてみんなで茶をそこで飲んだりできると良いのではないかと。公民館のように、屋内も使えて外に出ると夕涼みもできるような「みんなで使える場所」をつくってこれからの使い方を議論できると良いのではないかと。昔、川に板を張っているというのは魅力的だと思った。水草も見に来る人がいる。

(星野) みんなで使える広場のようなものをつくると良い。

(中学生) 川端滞在をまたやってほしい。

(住民) むかしは邪魔者みたいに古太田川を思っていた。

(区長) 雪捨てには助かっている。

(住民) 初めて来る人はみんな驚く。

(市議) 私なんかは早くこの地域の人が協力して三面コンクリにしていればいいのに、と最初は思っていた。徐々に意識は変わるものかと思った。

(住民) 中には三面コンクリにしてくれという人はいた。

(市議) 古太田川は生活排水の集合体なので、汚れてしまう。長井の生活排水が他の家に入らないようにする、というのは古太田川には当てはまらないと思ったし、伊庭は国のそれなりの指定湖なのでBODなどをしっかり調べていると思った。古太田川もBODやCODの変化を測定していくことで、水質の変化を可視化できると意識が変わるのではないかと。

(塩山) 小学生と一緒にカワドで佇みたい。

(結城) 一軒しかやっていないが水神様は見に行きたい。

(住民) 50年位前までやっていた。当時の写真がある。

(佐々木) 勝手に想像しているが、カワドにポツと火が付く様子がとても素敵じゃないかなと思っている。

(区長) 昔はそうだった。

(星野) 水神様は少し工夫するだけでロマンチックな風景になる。

(佐々木) かわばた滞在は名前が良くない。何か良い名前があると良い。

(住民) コーヒー淹れてたからカフェとか。「かわばたカフェ」。

(星野) あまり凝ってない方が伝わりやすい。気分は晴れやかにカフェが良い。

(住民) カフェって良い。

(区長) 一昨日カワドをつくった。村のみなさんでつくってほしい人がいたら言ってく欲しい。

(佐々木) 重機でちょっとやれる人が村にいるのはすごい。街中にはいない。

(住民) 正直、ここに住んでいて川の良さが全然わからなかった。外から来た人の話を聞いて、ポテンシャルがある川ということは分かってきた。だが、その一歩先、何をしたらよいかわからない。まずは、水をきれいにしたい。その技術的な知識はないので、水質を除荷することも並行して考えられると良い。2、30年前はホタルもいたので、ホタルが戻ってくれば人も来るのかなと思う。農業の関係なのか、排水の関係なのかわからないが、水質をまず調べるところから始めてみたい。

(区長) 水質が悪いのは住民みんな分かっている。市では下水の整備はしないとなっている。その代わりに合併槽の補助は出ることになっている。上の方(親水公園のあたり)で湧き水も出る。

(佐々木) 水質を専門に研究している早大の先生によると、敷地に穴を掘って炭を通すだけでも水質は大幅よくなる。市から補助をもらって、とやっているとすぐに10年位経ってしまう。出来そうな事からやっていると良い。

(住民) 水綺麗にするためには草と木の根っこがないといけない。昔は脇に木が立っており、木があるところは底も深かった。そこに魚がたまるという場所が何か所もあり、そこで水が浄化されていた部分もあった。今木がなくなったから浄化されないのではないかと。マコモなどの植物があれば窒素を取り込む。脇に植物が育つ環境があると水の浄化にもつながる。

(佐々木) 「小さな自然再生」という取り組みがある。少し流れを変えたり手を入れるだけで、川が自分自身をきれいにできる川になる。



参加者の集合写真



意見交換の様子

## 5 佐々木小学校・4年生の総合の学習



佐々木小学校の総合の学習の授業では、「新発田の歴史、文化、自然、産業等に関わる学習を通して、新発田のよさやそこに携わる人の思いを知り、それらを大切に、関わろうとする心や態度を育てる」ことが目標に掲げられており、小学校4年生は古太田川の生き物調査などを通じ、地元の良さを体験することを試みている。早稲田大学景観・デザイン研究室は、これまでに授業に3度関わっており、今回は4回目の交流となった。

2023年6月2日の第1回の授業では、早大の学生が教室にて、福島潟周辺の水の流れと、古太田川の特徴について説明を行った。その後、7月20日には実際に古太田川を歩き、下興野頭首工、カワド、親水公園などを観察した。9月25日には、NPO法人加治川ネット21による生き物調査が行われ、川の中に入り生き物を網で捕獲し、7種類の生き物を確認した。

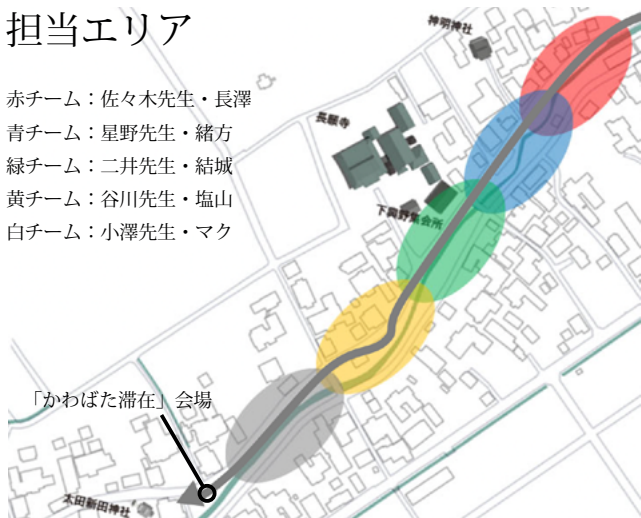
10月16日の総合の学習では、14日に行った「かわばた滞在」を踏まえ、地域水系基盤研究会のメンバーと古太田川を歩き、「ここをこうすればよくなるかも、より楽しめるかも」といったアイデアを考える「古太田川のかわばたでのんびりしてみよう!」を行った。小学生3名・先生方・早大学生1名ずつの5人グループで行われ、各グループが1区間を担当した。小学生の気づきを、先生や学生がスケッチやメモで記録、折りたたみ椅子を置くなど、古太田川の楽しみ方を発見した。

### 授業の流れ:

- 9:30 佐々木小学校から古太田川へ移動
- 10:00 古太田川の最上流（ニューエコライスの倉庫前）  
自己紹介・授業の内容の説明。5グループに別れる。
- 10:10 「古太田川のかわばたでのんびりしてみよう!」
- 10:50 「かわばた滞在」会場にてグループごとの発表
- 11:00 解散

### 担当エリア

- 赤チーム：佐々木先生・長澤
- 青チーム：星野先生・緒方
- 緑チーム：二井先生・結城
- 黄チーム：谷川先生・塩山
- 白チーム：小澤先生・マク



### 各チームで出た意見

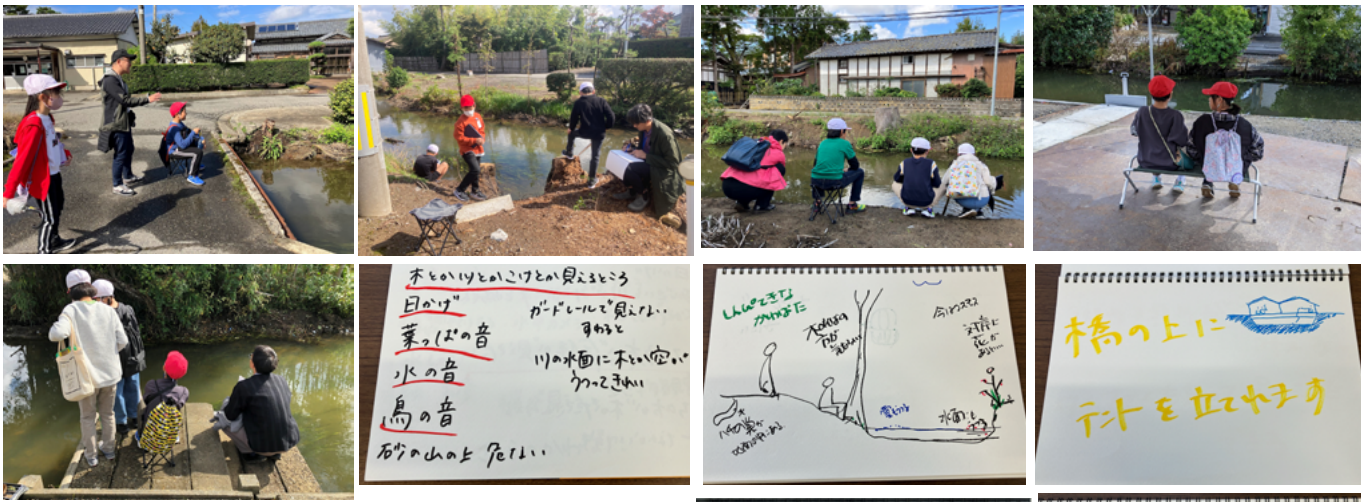
#### やりたいこと:

- ・キャンプ
- ・橋の上にテントを立てる
- ・魚釣り
- ・バーベキュー
- ・女子トーク
- ・川に入って生き物観察
- ・お花を育てる
- ・勉強
- ・カフェ「みずのうえ」  
お弁当を食べる  
ココアを飲む  
季節ごとのメニュー
- ・折り紙をする

#### 気づき:

- ・木の影は涼しい
- ・水草がゆゆらしてキレイ
- ・屋根が欲しい
- ・魚がよく見える
- ・静か
- ・水が近い
- ・リラックスできる
- ・でこぼこして生き物が  
たくさんいる





## 授業中の様子と 授業中に書かれたメモやスケッチ

### ラップアップ

@菱風荘

(佐々木) 地域水系基盤科研の最終成果に向けて、どのように進めていくか考えたい。古太田川の見つけ方や二井さんの山形県長井市での調査の観点は手法論としてまとめられるのではないかな。また実践として、昔は利用していたけれど現在は利用しなくなってしまったような施設などに対して、地域住民の方々がどのように取り組んでいくのが良いかな。

(二井) 土木分野は発注と受注がないと進められないイメージがあるが、実際には地域主体で進めているところが多い。

(佐々木) 一方で、地域で取り組んでいたことがだんだんできなくなってきているという様々な地域で共通の課題をどのようにしていくか。早大チームは来年度も引き続き古太田川での実践に取り組んでいく予定だが、地域のビジョンの描き方を含めてどのように進めていくか、また福島潟の話も可能であれば進めたい。また郡上八幡においても同様で、11月の社会実験の際にかつての水屋を復元する予定であるが、伝統的な地域水系基盤の管理方法などはなかなか引き継がれていないところがある。水とのシビアな向き合い方(福島潟であれば福島潟水門や戻されつつある潟など)も含めて、地域の人々が目の前にある水をどのように思うか、これまでどのように付き合ってきて、この先どのように付き合っていくのか、を考える必要がある。

(二井) 良い悪いは別として、シビアな向き合い方については誰かしらが手を打つ状況があり、長井も仮に水路がなくても生き残ることはできると思う。なので、地域水系基盤が放置されてしまう、放置されやすい状況に対してどうするか、考えたほうが良い、事業化されてしまう悩みと事業化されない悩みの双方がある。

(佐々木) 例えば、水辺総研の滝澤さんが紹介しているゴワナス運河などもビジョンを勝手に描いていく形であったので、ビジョンを描くことを先行して進めていく取り組み方はあり得ると考えている。

(二井) 私が調べているドイツの事例では、都市計画と河川の研究室が協力して進めている。それも踏まえると、日本での事業の進め方として、従来の請負型から企画提案型への転換は考えたほうが良いと思っている。7月の熊本調査の際、川沿いに住んでいない地域の人々も参加できる田んぼダムなどは良いと思った。流域治水の実際の効果については、事業そのものが民地の協力を得ないとできないのでそのまま見せることは難しいが、その精神のようなものは非常に大事だと思う。

(星野) 私自身は企画提案型のかわまちづくりはあまり経験がないが、これまでも依頼された場合は、中身を膨らましていくような形で取り組んできた。現状のかわまちづくりの事業メニューもそのような形を想定しているように思う。

(二井) 福島潟も河川区域とのことなので、かわまちづくり制度が使えるかもしれない。ただし、その事業自体は河川管理者が申請、実施することになる。ふるさとの川モデル事業は国から都道府県への補助金という形だった。

(星野) 矢作川でのかわまちづくりは、豊田市が国も巻き込んで取り組んでいたはず。

(二井) 泊江市でのかわまちづくりも矢作川と同様である。

(星野) 科研の最終成果としてどのような形にしていきたいのが良いかな。ブックレットなど目に見える形での成果を出したい。初めてその地域に入る時に見れるような感じの冊子があると、その後の活動を進めやすくなると思う。

(佐々木) シンポジウムを実施できるように動いていきたいと考えている。そのとき、どこに向けて発信するのが良いかな。

(星野) 連続シンポジウムというやり方もあるのではないかな。申請書で想定していた成果であるデザインノートは、事例集のようにするか、あるいは古太田川のような具体例に特化して深化させていくか。後者であれば、一本軸が通ったところに関係事例を付随させていくような形もあり得ると思う。

(二井) メンバー各自の成果を取りまとめる形もあるが、早大チームで実施する古太田川に対して、他大学メンバーのリソースを集中させていくことも考えられるのではないかな。

(谷川) 京大チームの近江八幡の場合は、市から委託を受けてのランドデザイン作成の他に、そこに入れ込めなかったビジョンなどを卒論などに入れようとしているので、それを取りまとめる形もあるかもしれない。

(佐々木) 我々メンバーの地域水系基盤の考え方・スタンスをまず見せていくことが必要であると思う。

(星野) 2024年度の年内(12月頃)にシンポジウムができると、最終年度の取りまとめに余裕ができるのではないかな。最終成果のブックレットやデザインノートの目次・構成、シンポジウムまでのスケジュールが早めに決められると良い。

引用・参考資料:

新潟県: 福島潟放水路散策マップ <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/200233.pdf>

新潟県: 福島潟放水路の主要な施設 [https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/niigata\\_seibi/shisetsu.html](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/niigata_seibi/shisetsu.html)

新潟県: 福島潟河川改修事業概要 <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/77759.pdf>